

書評

運動器疾患の「なぜ？」がわかる 臨床解剖学 第2版 徒手療法がわかるWeb動画付

工藤 慎太郎 (編)

B5判・248頁

定価：5,280円(本体4,800円+税10%)

医学書院刊, 2024年



「解剖学」を運動器疾患に対する適切な「技術」へと発展させた一冊

【評者】林 典雄 運動器機能解剖学研究所

このたび、工藤慎太郎先生の編集による『運動器疾患の「なぜ？」がわかる臨床解剖学 第2版』が出版されました。今回の改訂では、図や写真がフルカラーとなることで、読者の理解を高めると同時に、工藤先生グループによる基礎ならびに臨床研究を踏まえた新しい知見が盛り込まれ、さらに充実した内容へと進化しています。また、具体的な治療技術について、Web動画を通して解説されており、適切な運動器診療を志す理学療法士、作業療法士、トレーナー等にとっては、格好の指南書となる書籍へと生まれ変わりました。

書籍は改訂されて本物といわれます。初版を世に問うた後も、さらに探究し、真実を求め、研究知見を積み重ねた者にしか、改訂への強い思いは生まれてきません。そして、その作業を成し遂

げた工藤先生ならびにご執筆の先生方に敬意を表します。

さて、初版が出版された2012年の最大の出来事は、人工多能性幹細胞(iPS細胞)を開発した山中伸弥教授が、ノーベル生理学・医学賞を受賞したことではないでしょうか。山中教授による「0から1を生んだ発想と努力」が、現在行われているすべての再生医療や新薬開発の礎になっているわけです。一方で、われわれ凡人にとって「0から1をつくる作業」はなかなかできることはありませんが、すでにある「1」を踏まえながら次のステップへと進む努力はできるはずです。運動器診療に携わるわれわれにとって、多くの先人が残してくれた最も重要な「1」が解剖学だと、私は思います。その解剖学を、臨床的な解剖学に落とし込むのが「2」の作業、そして解剖学的な病態に対する適切

な技術へと発展させる「3」の作業は、臨床に立つ者としての義務ではないかと考えるわけです。本書は、まさに「1」から「2」へ、そして「3」へと展開する、運動器理学療法の道標となる書籍ではないかと思います。

人体を構成する骨の形には意味があります。靱帯の走行にも意味があります。筋の形態、付着場所にもすべて意味があります。その意味をじっくり考えると、ヒトが動くための機能解剖学へと発展します。そして、ヒトがよりよく動くために変化してきた構造のなかで、少しばかり無理強いされた部位で病態が生じると考えると、運動器診療のポイントがみえてきませんか？ そんなヒントや答えが載っているのが本書です。

ぜひ一度、手にとり、じっくり読み込み、日々の運動器診療を見つめ直してみたいかがでしょうか？